

芥川龍之介

「私」小説論小見





「私」小説論小見

— 藤澤清造君に —



文芸上の作品はいろいろの種類に分たれています。詩と散文と、叙事詩と抒情詩と、「本格」小説と、「私」小説と、——その他まだ数え立てれば、いくらでもあるのに違いありません。しかしそれ等は必しも本質的に存在する差別ではない、唯量的な標準に従った貼り札に近いものばかりであります。たとえば詩と言うものを考えて見ても、若し或形式に従ったものだけに詩と言う名前を与えようとすれば、あらゆる自由詩や散文詩は除外し

なければなりません。若し又自由詩や散文詩にも詩と言う名前を与えたとすれば、それ等の作品に共通した特色は広い意味の「詩的な」こと、——畢竟文芸的なことになるだけであります。韻文芸術と散文芸術との差別もやはりこの詩と散文との差別の複雑になっただけでありましょう。成程散文芸術は、——たとえば小説は一見した所、何か詩とは異っています。が、その差別はどこにありますでしょうか？　小説は屢々詩に比べると、もっと僕等の実生活に即した感銘を与えられていると言われています。又こう言う感銘は小説以外にあるとしても、唯韻文を用いた小

説、——叙事詩にあるばかりだと言われている。しかし叙事詩と抒情詩との差別も、——客観的文芸と主観的文芸との差別もやはり本質的には存在しません。例を西洋に求めないにしても、「アララギ」派の短歌の連作は抒情詩であると共に叙事詩であります。既に叙事詩と抒情詩との差別も消え失せてしまうものとすれば、あらゆる詩は忽ち春のようにあらゆる散文の埒の中へも流れこんで来るでありましょう。

これだけのことを述べた後、僕はまず久米正雄君によって主張され、近頃又宇野浩二君によって多少の声援を

与えられた「散文芸術の本道は『私』小説である」と言う議論を考えて見たいと思います。が、この議論を考えて見るには「私」小説とは何であるかを明らかにしなければなりません。本家本元の久米君によれば、「私」小説とは西洋人のイツヒ・ロマンと言うものではない、二人称でも三人称でも作家自身の実生活を描いた、しかも単なる自叙伝に了らぬ小説であると言うことであります。けれども、自叙伝或は告白と自叙伝的或は告白的小説との差別も、やはり本質的には存在しません。これもやはり久米君によれば、たとえばルツソオの懺悔録は単



なる自叙伝に過ぎないものであり、ストリンドベルグの「痴人の懺悔」は自叙伝的小説あると云うことであります。しかし両者を読み比べて見れば、僕等は偶々「懺悔録」の中に「痴人の懺悔」のプロト・タイプを感じることはあるにしろ、決して本質的に異ったものを感じることはありません。成程両者は描写の上とか或は又叙述の上とかには、いろいろ異っているでありましょう。（その最も外面的に異っている点を挙げて見れば、ルツソオの「懺悔録」はストリンドベルグの「痴人の懺悔」のように会話を別行に印刷していません！）しかしそれは自

叙伝と自叙伝的小説との差別ではない、時代や地理をも勘定に入れたルツソオとストリンドベルグの差別であります。すると「私」小説の「私」小説たる所以は自叙伝ではないことに存在するのではない、唯その「作家自身の実生活を描いたこと——即ち逆に自叙伝であることに存在すると言わなければなりません。しかし又自叙伝であることは抒情詩よりも複雑した主観的文芸であると言ふことでもあります。僕は前に抒情詩と叙事詩との差別は——主観的文芸と客観的文芸との差別は本質的には存在しない、唯量的な標準に従った貼り札であると言いま

した。既に叙事詩は抒情詩と本質的に異っていないとすれば、「私」小説も同じように本質的には「本格小説と少しも異っていない筈であります。従つて「私」小説の「私」小説たる所以は本質的には全然存在しない、若しどこかに存在するとすれば、それは「私」小説中の或事件は作家の実生活中の或事件と同一視することの出来ると言う或実際的事実の中に存在すると言わなければなりません。即ち「私」小説は久米君の定義の如何に関らず、こう言うものになる訣であります。——「私」小説は嘘ではないと言う保証のついた小説である。

もう一度念の為に繰り返せば、「私」小説の「私」小説たる所以は「嘘ではない」と言うことであります。これは何も僕一人の誇張による言葉ではありません。現に「どんなに巧妙でも、『私』小説以外の小説は信用する訣に行かない」とは久米君自身も一度ならず力説している所であります。しかし「嘘ではない」と言うことは実際上の問題は兎に角、芸術上の問題には何の權威をも持っていない。これは文芸以外の芸術——たとえば絵画を考えて見れば、誰も高野の赤不動の前にこう言う火を背負った怪物は実際いるかどうかなどと考えて見ない

のでも明らかであります。けれどもこれだけの理由により、「嘘ではない」と言うことを一笑に附してしまうのは余りに簡単でありましょう。実際又「嘘ではない」と言うことは何か特に文芸の上には意味ありげに見えるのに違いありません。ではなぜ意味ありげに見えるかと言えば、それは文芸は他の芸術よりも道德や功利の考えない□と深い関係のあるように考えられているからであります。が、文芸もこう言うものと全然縁のないことはやはり他の芸術と異りません。成程僕等は実際的には、——何をいつ誰に公にするか等の問題には道德や功利の

考えをも顧慮することになるであります。しかしそこを乗り越した文芸それ自身としての文芸は何の拘束も持っていない、風のように自由を極めたものであります。若し又自由を極めていないとすれば、僕等は文芸の内在的価値などを云々することは出来ません。従って文芸はおのずから上は「文芸化せられたる人生観」より下は社会主義の宣伝機関に至る奴隸的地位に立つ訣であります。既に文芸を風のように自由を極めたものとすれば、「嘘ではない」と言うことも勿論一片の落葉のように吹き飛ばされてしまわなければなりません。いや、「嘘で

はない」と言うことばかりではない。

「私」小説の問題に多少縁のある謬見を挙げれば、「作家はいつも作品の中では正直にならなければならぬ」と言うことも、やはり吹き飛ばされてしまふ筈であります。元来「正直になる」或は「他人を欺かぬ」と言うことは道徳上の法律ではあるにしても、文芸上の法律ではありません。のみならず作家と言うものは既に彼自身の心の中にちゃんと存在しているものの外は何も表現出来ぬ訣であります。たとえば或「私」小説の作家はその小説の主人公に彼自身の持つていない孝行の美德を与えたとし

て見ましよう。成程その小説の主人公は彼と異っている以上、道徳的に彼を嘘つきと言うのは当っているかも知れませんが、こう言う主人公を具えた或「私」小説はまだ表現されない前に既に彼の心の中に存在していたのでありますから、彼は嘘つきどころではない、唯内部に あったものを外部へ出して見せただけであります。若し又嘘をついたとすれば、それは彼が何かの為に彼の天才を売淫し、彼の内部的「私」小説を十分に外部化するこ とを（或は表現することを）怠った場合だけでありましよう。「私」小説と言うものは上に述べた通りの小説で



あります。こう言う「私」小説を散文芸術の本道であると言うのは勿論謬見でありましょう。しかしこの議論の誤っているのは必しもそれだけではありません。一体散文芸術の本道とは何のことでありましょう？ 僕は前に散文芸術と韻文芸術との差別は本質的に存在する差別ではない、唯量的な標準に従った貼り札であると言いました。すると散文芸術の本道と言うことも「最も文芸的な散文芸術」などと解釈することは出来ません。若しこう解釈することは出来ないとすれば、それは唯「最も散文芸術的な散文芸術」と言うことに落ちて来なければなり

ますまい。けれども「最も散文芸術的な散文芸術」と言うことは畢竟散文芸術と言うことだけであります。たとえば散文芸術の代りに紙巻煙草を置いて見ても、紙巻は煙草と言う本質の上では少しも葉巻と異りません。従つて紙巻の本道と言うことを「最も煙草的な紙巻」とするのはおのずから滑稽になるであります。そこで「最も紙巻的な紙巻」とする外はないとすると——僕は常識の名前により、諸君に問いたいと思います、——「最も紙巻的な紙巻」とは当り前の紙巻以外に何を指しているのでありましよう？

散文芸術の本道と言うのはこの

「最も紙卷的な紙卷」と言うのと同じことでもあります。こう言う例の示す通り、「散文芸術の本質は『私』小説である」と言う議論は単に散文芸術の本道を「私」小説に置いた所に破綻を生じたのではありません。散文芸術の本道と言う空中楼阁を築いた所に抑々の破綻を生じているのであります。では散文芸術の本道などと言うものは全然存在しないかと言えば、それは或意味では必しも存在しないとは言われません。あらゆる芸術の本道は唯傑作の中にだけ横わっています。散文芸術の本道も若しどこかにあるとすれば、恐らくはこの傑作と言う山上に

あるのかも知れませんが。

僕は久米君によって主張された「散文芸術の本道は『私』小説である」と言う議論を略々批評し了りました。

僕の立ち場は久米君の立ち場と生憎両立出来ぬものであります。しかし僕は久米君の議論に少しも敬意のない訣ではありません。たとえば久米君は「私」小説から截然と自叙伝を分ちました。この差別それ自身に僕の賛成出来ないことは既に述べた通りであります。しかしこの差別を立てたことは或意味では最も文壇の時弊に当つていると言わなければなりません。僕も亦多少の暇さえ得れ

ば、この差別から出発した小論文を書きたいと思っ  
ています。なお又僕は徹頭徹尾宇野君の議論を閑却  
しました。それは宇野君は久米君のように「散文芸  
術の本道は『私』小説である」と言うことを断々  
乎と言っていない為であります。尤も宇野君の議  
論の中にも「僕等日本人の文藝的素質は『本格』  
小説よりも『私』小説に適している」と言うこと  
だけは力説されているのに違いありません。しか  
しそれは宇野君の常談と見なければなりません。  
なぜ又常談と見るかと言えば、僕は僕等日本人の  
生んだ「本格」小説的作品の中に源氏物語は暫く  
問わず、近松

の戯曲、西鶴の小説、芭蕉の連句等を数えることを——  
いや、それよりも宇野君自身の二三の小説を数えること  
を大慶に思っているからであります。

最後につけ加えておきたいことには僕の異議を唱  
えるのは決して「私」小説ではない、「私」小説論であ  
ると言うことであります。若し僕を目するのに「本格」  
小説だけに礼拝する小乗嘗糞の徒とするならば、それは  
僕の冤ばかりではない。同時に又日本の文壇に多い「私」  
小説の諸名篇に泥を塗ることにもなるでありますよ。







日本文学電子図書館

---

「私」小説論小見

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：「梅・馬・鶯」

新潮社

大正15年12月21日 印刷

大正15年12月27日 発行



日本文学電子図書館